

§ 1 今年が多発生！畑のカメムシ類について

梅雨明けてから増えてくる害虫の一つにカメムシ類があります。ピーマンやナスなどのナス科植物や枝豆や大豆などマメ科野菜を好み、口針を刺して養分を吸い取るため、作物の生育不良や変形を起こします。今年はや暖冬であったせいも、近年まれな多発傾向にあり、注意が必要です。カメムシ類は4月頃から繁殖期が始まり、5～8月にかけて産卵し、1～2週間で孵化、約1か月間脱皮を繰り返し成虫になります。



今月は特に畑作に被害をもたらすカメムシ類についてご紹介します。

＜マメ科作物に被害するカメムシ＞

実と葉に被害が及びます。写真左よりホリカメムシ、アオカメムシ、クキカメムシ、マルカメムシ等が、若葉がつき始めるころに飛来し、葉の伸長期から子実肥大期にかけて被害をもたらします。

＜ナス・トマト に被害するカメムシ＞

写真右からアオカメムシ、ミミカメムシによる被害が大きく、ナスでは、果実が吸汁されると、果実がくぼみ、果肉が褐変します。トマト果実では、吸汁された部分から円状に白くなります。茎や葉も被害され、茎が被害されると被害部から上が萎れます。

＜カメムシの臭いは？＞

カメムシは腹面にある臭腺から、悪臭を伴う分泌液を飛散させます。この液には、アルデヒド、エステル、酢酸等が含まれ、臭いの主成分はヘキサナールです。敵の攻撃など外部からの刺激を受けると分泌され、捕食者に対するの防御と考えられ、群れていると1匹が臭いを発すると周辺一帯のカメムシが逃げ出す現象が見られ、仲間に対するの警報の役割も果たしているようです。

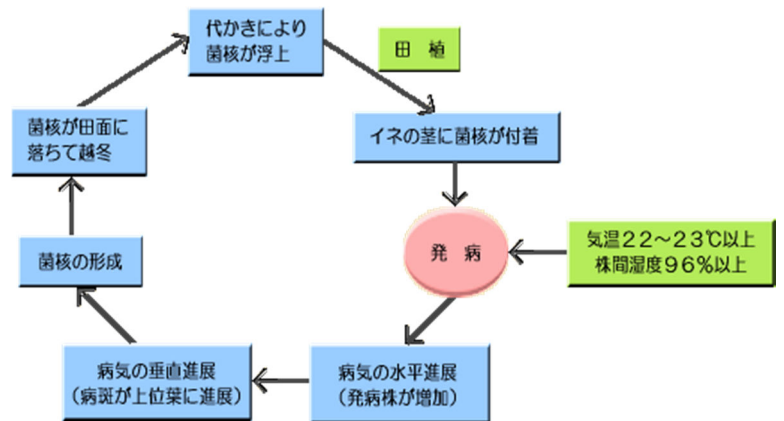
カメムシ類に対する防除薬剤一覧

品名	有効成分名	系統
テルスターフロアブル	ビフェントリン	合成ピレスロイド
ロディー乳剤	フェンプロパトリン	合成ピレスロイド
MR.ジョーカー水和剤	シラフルオフェン	合成ピレスロイド
スタークル、アルハリン顆粒水溶剤	ジノテフラン	ネオニコチノイド
ダントツ水溶剤	クロチアニジン	ネオニコチノイド
カスケード乳剤	フルフェノクスロン	IGR 剤
トレボン乳剤	エトフェンプロックス	合成ピレスロイド
キラップフロアブル	エチプロール	フェニルピラゾール
アグロスリン水和剤	シベルメトリン	合成ピレスロイド
アクタラ顆粒水溶剤	チアメトキサム	ネオニコチノイド
ベストガード水溶剤	ニテンピラム	ネオニコチノイド
アドマイヤー顆粒水和剤	イミダクロプリド	ネオニコチノイド

§2 イネ 紋枯れ病について

<紋枯れ病とは？>

糸状菌の一種で、担子（たんし）菌：タナテフォルクス・ククメリス由来で、イネ等に発生する病気です。前年の被害株や畦畔などの羅病雑草に形成された菌核が越冬し、第一次感染源となります。紋枯病菌の菌核は、代掻き時に水面に浮上し、イネの株元に漂着します。気温が22℃を超えて、株間の湿度が高くなると、菌核から発芽した菌糸が伸長し、葉鞘内に侵入し、発病に至ります。初めは暗緑色の水浸状の病斑が発生し、のちに周辺が褐色、中心部は灰白色の楕円形の病斑となります。病斑から菌糸が伸長し、分けつ茎や隣接したイネ株に伝染し、葉鞘を伝って上方に伸びて、新しい病斑を作りながら蔓延します。本病にかかると、下葉からしだいに枯れあがり、イネの茎が弱くなり倒伏しやすくなります。高温、多湿、多窒素、早期栽培は発病を助長します。



<防除のポイント>

- 1) 初期発生が見られたら、幼穂形成期から入熟期にかけて薬剤散布を行う。常発地では育苗箱施薬も活用する。
- 2) 窒素肥料の多用を避け、過繁茂にならないようにする。
- 3) 多発田では、代掻き時に浮遊するゴミに紋枯れ病菌が混入しているので、畦畔沿いのごみは除去する。
- 4) 冬場に畦畔の雑草を焼却処分する。



系統別もんがれ病薬剤一覧

品名	成分名	系統
モンガリット剤	シメコナゾール	EBI
モンカット剤	フルトラニル	散アミド系(呼吸阻害)
リンパー剤	フラメトピル	散アミド系(呼吸阻害)
バシタック剤	メプロニル	散アミド系(呼吸阻害)
アミスター剤	アゾキシストロビン	ストロビルリン系
オリブライト剤	メミノストロビン	ストロビルリン系
バリダシン剤	バリダマイシン	抗生物質(トリハラーゼ阻害)
モンセレン剤	ペンシクロン	フェニル尿素系
モンガード剤	ジクロメジン	ジクロメジン